

小村廬日記
九月和三年
九月下院

特別
14
1919
604

50
45
40
35
30

176869

小桔廬日記

昭和三年九月廿一日起筆

九月

廿一日

久が久成一來訪ひの後用ゐる深ノ木洞
是ニ又其のう宿して之を旅館とす
朝食済まゝ相不開三才あらゆる多の爲
洞壁ヨリも殊外一色ある。午後一時大限令
歸之則はぬるに至る時あ然の事もあらず

處す。七月中秋紀入へもとひらき、場所は早
大、移家より、上棟式奉行より、直丸の上用
御式を行ふも、実行委員を解くこと、別、
後援へも役くまゝ孝と協調し、九時内
やも、驅除剤も、さる枝の近身にて、空田脩と
云す。

二十二日

既、森賜酒を式設り、余沙汰以上、久居又
往來の為め、事ある、また田宅も電報す

急、行く、田や種類等は、之の枝の給
乞つて、多時春浜にて十二時家にゆく。戊
辰紀念酒：ぬあ（き）余の田歌採と種
十数枚を著し、異心苦愁者の曲ケ
フ立の江ノ島府紀行配本、筑山東三
吉画の高ニナ内都陶す、午後池田龍一
とれき草木、阪本問題を内成し、杉千鶴の
都度をすき四五日へのお便りをすくま
せんす、

二十三日

日

既、坂本羽野監修の日記の執筆を催さんとし
都未松子伯池田山本にて後を以つてえく
交渉す、戊辰紀念は：坂もとを補稿を校
す、洋本ケンタウルの江戸奉行と渡あ、赤
が録を著す、午後高橋油三郎の拍を賄
ひ、酒井太平とも娘法螺の技有狀列り、
四時紅茶飲む松子伯池田山本、酒毛と會す
坂本羽野監修の内様す、

二十四日

樺原製

既、早朝田中總督学校河野二つを來訪、か久
江成（モズキ）柏木初音課主事退院等と
へき、依頼する所あり、清瀬市立文部選舉事
務六配本、駿河去来、正午酒を飲酒す、
而田未の戊辰紀念より補稿を交付、長
恩印社（モズキ）印冊二寄である、

二十五日

既、岐阜の酒井芳平、同士、外に旅宿三四と

暮す。小久江算一郎の柏木院の柏領を載
て、偶々羅波幹子と足訪。時間短しとめ、
本城跡を詣。小寺山古墳と脱糞都の古剣
を上記。其後次々と坂見田文二郎江志綱の材
料を郵送し来る。名古屋の河刀弘文、山内
梅軒の印相を送り印す。鈴木卯三郎半牧
の遺稿と推測ありと示す。馬頭琴、東山お嬢
三冊のふと木子玉、半入本筋端謡丸用の書
を有り、宮内省圖書寮新華紀念賃酒局
と觀る。今度は吉川和歌酒亭にて御賛同
と題す。

樺原製

の紀官令に臨む。十二月初旬至都。半牧と
大谷三開く件と福善また今年度第一新村出
山席。本車や丁田や柏領を訪

二十六。

而田や柏領を詣。十時出版部と刊り、高田
と音板の合アニツキ而往し、幹部令ニ説あ
午後一時華教令附。到り文ひ柳原の
例令を以て之と和而化朝鮮人の心の向ぬ
三つき二時乃海游し、歸て日半猶のり進

チを率へて行進せんと出立。山老守の事
状況を一時弓手市移立時今も聞かぬ事
御の三八公に就く。時印也。

二十七日

岐今朝冷雨。嵐津子祝賀會をあそび未
簡大漫長め始終。難即却平二十石贈
塔み長野市未ち、萬葉文部省民田の近傍
集まき。山の内山河源治復本多
左二配本を多く。火入江第一未治十一時

東京今確ニ臨み。松井而池田山本曾因
酒と坂本三郎を迎へ。又後、令議
つき。協議す。坂本主。松井勝手の主張
あり。口説の時間。一日り、先二角余
茅提議のことく。今村是れの問題
と詮詮ある。今村の森葉に附すること
ある。止め。德子外一二りを取。持す。
五未欣生。もとおと鷹。ニ弓矢。向ふも
支付。徳音敷設。火成辰代。知て。之の日
未う弓鷹を候。其間の下後候奉る。

へキ 改正と金繩の仕事を行ひ

二十八日

西秋父宮清時儀の日也。十時出版部の幹部
会に於ひ説教の爲め辭をあ其他を要す。中
間飲食法も法要ある。就刊する。御医社も
来間、午後二時佐藤之吉と伴ひ約半日を
を過ぐ。飯はシチマの味噌とうじ味噌と
飲む。ゆづ。印刷は私が職を二名もと余
の袖毫を需め未だ本の写しを終ら

樺原製

高野山にて行方不明の鶴木を報告す
不立身前をす五年後故人可也。

二十九日

西中電鉄改修内徳子(?)ふと見す。池田
龍一と電話を交ひ、龜山市三番地楠瀬
田年才と話。出版部の武田謙て未だ済
未だ又別々。午後揮毫。出版部とも山梨
金鳥、金三十円也。納付済。出版部とも山梨
鐵橋漫遊記本。支那秀才今社の宣傳
日本語半級紙鐵橋漫遊記を残み、亦数枚

立元吉揮か、既に池内龍一平送、夜未向

三十日

日

而帝通社内紹摺志、リキナホ利、八朝大限
候とち山に訪のを学校の会計制、
大江口に立つて未だ、外出才四十日後、
已、城橋没落を讀む。四十日後、年々、
寺時間即儀す。午後、先と往き山附益、
葵、散り咲き、そぞ細叶、餘る、
狂うて城橋没落を讀む。

十月

一日

皆、朝未施用を兼ね、既上來り注射士施
ニテ、御供走丸井四丹上殿古於義彦よ
リ賜、十時、内所印刷、市役小林少人
江主田と自動車と並、ノシ大森家、
井、立付、少人、少人、工場、西、日高、
父子工場、主田古東洋、と附りし料
既底松淡公底、午後、と其ノ事也。

五時より臨済子爵の米寿を祝す。室
外く、見合千人。滿う日ア御祝也。祝辭
を後々、獨々大使より上達祝を為す。公後
祝詞。九時より伽名。

二日

此日花亮公より独毫主教文は内參、
祝名代押。又命元元并印刷。社ノ事
の為揮毫の十數枚。文件。段上献言來
る。既に田中總督より秋つ野三つ子的

棟原製

了後して去る。午後神田の者衣を着て給ひ相付
けられを難よしゆゑ。坂本三矢、長め嫁
嫁被覆のあい根から(セラ大限令坡)旅
聞めみうち即刻御用來。間大らじも未也。
山本吉庵(ヤマモトヨシアン)と申す御内。

三日

此中で欲流、法事の為考を敷きす。戊辰
紀念の余の禱を補山房の更生を歎歎(ハサハサ)
筆(ハサハサ)。和田純來訪。楊文政の新作を
徳羽(タケヒ)しとし父の所を考へ。枝

と乞ひ、坂本三ゆき祝電を貰ひ午後開と
洋て書面。且は女重能紙。及移す。キ
山陽の支那、乾もと船主、穂の源来
五時龜崎町の修善園に松平湯を拵
鈴木山本池田上原と今ア、宇野校の行
往門巣を内儀し、先づ余糸部の廊
行を行へ一と六丈、外出才十無父此一
直心長身(日)取給おを賜

四日

雨、田中徳祐及行二つ。此の仕事も済、協議
まること、河井あら復演時聞彼或につき、協
議の者来る。能一矢理一身上の件につき、來
候、文藝春秋社より技術謝金を送り
来る。帝國の株券につき、片良貞二
吉帆と與す。森脚美村(名義)と日本政
治の鹿谷、除因らと利共、車を贈りまつる。
午後先を休め、散策、誕生日、悠紀人形見
化を購入せしもの、酒飯してゆく。外出中
難波早大井まで到り、近江人西村氏細川

也店を以て余の博覧ももとより、自修印譜
古村印譜二冊を购入

土日

星天、朝来書畫并筆施化、寄于へき山
陽の邊の稿を寫して下さり成る。不様三印
ある。佐伯仲亮、久松牧と其子。竹内徳秀と
而す。彦井一東流、左馬郡神樂江巻とよ
り近仙の山林を躬ぎ奉る。其の行義、彦秀
也と号す。五時太陽庚午より始終技宿

あう事多々頗る赴く。宴後酒色亨と小
松、飲みを早大の理多合。今計部掃除
の手決す。大波の森並木をしゆつ幕布
を寄て未二、三時吹地震す。

二〇

雨冷重し、田中穀段直乃は現多合の結果
つき長時間詰り、出假舟の件につき往利和泉
旅十時起と付を起す。此中二鉢を控
め、御吐に吸して薬飯の映画を見る。

ベン、バー わよ見る。前も仰る。

七日 日

雨利龜山東三木ハ秋菊のち簡一巻於
賤ひ入る。書を書物代金の約十五日文
行。古画骨董。龍溪。山陽の骨董
一箱を掲載。つき向苑社。馬六
と丸子。旅館を兼ねて宇都宮真
崎。栗と鶴。未だ小井坂三郎の近接
集。つま未だ。午後人の為に掲。毫端紙

棟原製

戌了。森雲美。酒也をもみす。早大祀主の御
創立二十週年紀念式奉行(古川)の請牒
ヲ西村徳大より。手状とも無く。其内徳
子。之を来し。五時大隊会場にて。役本三十六
長め。旅館。夜宿の室に詰む。

八日

雨。塔川新。迎若。維新前後の政事と小棠
上院の式。を詰り来る。平山半之。秋田本仰家
の書画。主其は別來。田村壯二郎。文政書

沈り件つき事務、中略。飲酒も法度の葉子
と音を耳にする。十時、印刷の重役会議も
午時、日没。食後陰化に池の於木上原橋
田山本源毛と合して之の後の沙汰つき内談
すまでもなく、外牛中牛内長庚毛井根川
毛井、毛井首はり方画を残して去了。又お
と鶴毛、巻川新ミ湖毛もあさ、書畫骨
董毛流毛、石船毛を寄す。赤田毛の牛内
長庚毛ちれをあす。今日印刷今化の今誠
毛も童役の増体を決す。熱海毛宮路毛

樺原製

三日うちれり。和田萬喜毛論説拔擢を寄
て来、寝後、總川の小西木上毛と谈す。

九日

此西脇勝村守の義勇山陽のす幅と極く
まう余の需毛とおみ合毛にて通す。行ひ
の古歴某毛にじりて押立毛三枚郵便す。紙
後牛内總子毛見えぬ高せしる。河井夢寐
す。旅毛、既に室田脩来の學校のじすと
つき余毛も遠解ともとむ。然々久一也未

二、來訪物を貰ふ。森陽美術会場にて
ヨリ、わざと見初の純外技及うでかさの場所列の
午後ち田縁先の桜の脇にて未法小坂上
町高を渡り高野山並、立木山の三日
ち飯塚の山並みより其間

十日

晴、細川吉庵未法揮毫三枚並み内家の花
もと蓋印を托す。岸本元治堂印譜の五点印
を依頼。田中穂村前枝の「新古今集」
を貰ふ。

樺原製

今朝の被物、也に之に未法、午後二三、紙揮
毫も、飯塚産次郎直政・美術度、もと辰
造、今、其内状別、所得税徵役票川
を受大病入院にて歎す悔あし

十一日

晴、早朝大風、灰とも山河の事の桜の紅
絆問影々つゝき内裏す、偶て難波幹ちす
すもう十音は時雅お負と附せよべと
校紀改定の提ああこつきふりす、十時

毛、其の生の赤茶紀念のヘルバムに收めへく、余
の寄主へも掲げて寄主が喜み、田下總督
来候、特文坡の旅總報の初刊に收められ
きる書と行す、五万圓預金が出来ず、
多くおれども實は仰次禁物。

十二日

時、今朝受丈終ニ就き、村山勤じゆも
度芋一株、此を來るの後日複数分に因
陈列豪麗と為すに、此花の名前を専門

樺原製

心に交はず、布控様三未拂既に稻田源、采
ふ聲う哉、其の洲、八葉和歌の事もと示
さう直筆し跡とえきとも、於此を示
す、長井紙化吉み川彼也、未訪、村山勤
いの神牛江巻石、酒もと見えず、今夜此
葉紙、立田緑也、根元もと見ず、今夜此
人とも之公し、校観改正の件、立田四や衝
矣、立田見事も寿を内儀す、お多賀、前
月三十八の事、立田七十五歳、松山二十七上
リぬを御も。今夜大の死体を解剖の方歎送

三ノ日

十三日

西ノ羽音の役り間鑑すつき 滝深子を訪ルと
（手商以と支々黒木す、於ねを考へず。升
内長庚耳浴院で茶望三月の森村松可
ち千形幼院にて来間、十時出浴船せ、
飯後書肉宣條の為め余・放送
を説か説してゐる大連ある也に内に
リ来方全の葉書後遇を報じ未だ七
時塗井の松平向正訪ひ坂本三中と記

樺原製

改し学校の事を想ひし蜜飲を得て十
時内モ

十四日

日

吹笛二三絃文：換す。二十尺力も山若
遠近を定む未だ石保にて來訪無
先果鮓御を以て、十時上尾橋川亭
稀芳複物を、國古陳列今ヒ詠又家
元本三十数枚一出陳一特の御毛丸也
と考す。大抵南羽音被彌縫古肩田

正未甚。類面の擅毫を托する個具を置く。
旨。西村徳大と申す者。十本手書と申す
グラビヤ印刷の教育掛図六種を運送し
来る。五十石力足らぬとも言ふ。

十六

今、西村徳大と申す者の先勝給元と申す十種
矣。貰。東大山田吉右衛門の源利。義方と
通印。龜山亭三と申す子玉の達也と
示。之は内道。未遂。森村松嶽り申す。

樺原製



チ形沙汰。此つを更にミシ差入。六十。間刻引
相金五十四日也。竹内徳大。來方廿四日内
着入。寫。工業促進部。松
外。小。か。が。猿。す。検査の為
の段上方。力ねざる。午後早
大。維持。炎々。臨。授。税。政
正の件。并。犯。さ。委。任。の
件。控出。多。満。交。役。本。監。查。役。群
表。ハ。保。留。松。平。ヒ。余。更。く。役。本。と。魚
あ。す。と。う。三。時。下。地。空。あ。

日比谷園芳賀源之渡西宮殿一や人成
余が放送こうき一年前、西國講并能面目
利のちを移平伯、賜ふ。廿一日市山野里郡の
紀根送り大隈侯うち來る。

十一日

時、四五の難儀をもがく奉宗大より西國講太
郎の使しをありわとながま。止武又東福
新義社の鳴こゑでうじ才放送の事の照と
業す、大陸在朝終焉の差ある歎二枚相

樺原製

毫、無名記一枚、献未未活、此の新義社
の為の五紙揮毫にあし、新義社の義
士あと采二付合天井一枚の板、以て
當腰の四字をもす、何年か後、簡す
十二月三日からさちと京都に往りて同吉飯
大弓のあゆの物利ひ御十九里郡の觀根
村えど木一つ、夜大隈侯と立ち行くことを
済す、於ねをあけしむる。

十七日

所、坂上寺に注狀を施す。坂上余の尿を捨て
し、竹の結果と根じえを、不似合ひ。せんばく
の事よりし。唯、聊かぱいさんと、文も體を
生まぬ。あまつも根絶と云ふ。えりはす
の洋財を、うそく。近本春江やもとシヅラ、じや版
、皇宮大觀廿一枚と、うつて来る。黒郡り
、(と)大隈辰巳と來る。西村徳右代人秦
宗大寺山陽井田六。古西橋廿四橋を持
參、辰観。時と稱す。吉田秀人社用と云葉
訪、小赤塚三木橋。大坂力無儀とらうど

樺原製

松井申とまうすよふ。入母連とを余り。常
清とさうど御出御う。うれし。而打方萬
伴と。よ山をとゆかて。松乾向道印を
見。其の印。又。吉田らしく。ゆき。牡丹と主
意。門内。而。酒。江。酒。飲。し。こ。ゆ。と。料。改。心
。大友旅人の塑像と配付し。耳。三木
武吉差入。お代二十日。牡丹二枚す

十八日

雨。羽来旅館をあたず。龜山。三木の木

新薦あ爾代三十山拂満中鳴子玉の遣
印と紙ひへり河井お後波多を以て一
事訪、其一日放送すと被宣を第と
放送高仲木一人、郵便、飯後聖旨
村井内と望累大君と詔り未だ十時
出假部に引り新部入りて歸む、午後四
もひ改辰の終て歸きと飯文と有
す今夜懶門令西司方館御室の内緒令
眞吾三経ます

十九日

既に流成辰との飯文を譯して稿田
二郎送り、上角宇大ら一う未出、社持
宗八山田清心東近江久野(ひの)代
頼の持立元來板役日献立と交付す。
和田純(ひの)平至京都使_公傳不當と云
道半を宣せ玉手、十一時_る支と付ゆて北門
を出と難休_休是と云飯、邦樂社の映音
を名をゆふ。

二十日

岐大川候（飯後画家北菴 教士）立拂奉
太らや西村家の書画版の多印も七十
枚未だ平山堂の前幕利即十二時漸かと
す。寒飲と共に利助画房と乙終
り此の腰也と之より一画を喫す。西村
の代人奉手頃の夏支毛筆、附上弘庵より
リ例の注射を施してある。三時又は併み
浅翁：散策又刻切矣。

二十一日

日

雨。村山秋浦を詣き西村家の書画と同
道。全部腰心と書。未拂脇未拂。九時
半放送局と自動車。印と毛筆
行く。撮影。午後十時三十分。と終。卷
諸書。午後二時高級次の講義。と二時三
十分。訓文。修業五時半。午後六時五十分。上課。

利り大限矣と嘗々此の報時と云々千里
郊へ向ひあつて候ふとを六時半十分
至波の多川（よのたか）を過すと日出れあら
角守（つのま）六時東道多岐敷（おほきひし）を記る。筋舟
五家大面通（おほめどおり）外に浮遊して家外在處より
回往。

二十二日

皆拂曉就不知を過ぐ。往々紙後（かみご）を以て
山へ。一時未だ車の便うこうし泊（とけ）

之夜八時半分三日市主翁、こゝへと
電車、乗換六哩行き。宇大年月
ニ着。北門ニナキ合を云々。此を新間の
地主のものあひ聞けり也。是即紙後（かみご）
未日也。此即引野町也。麻生屬下、亡友田
村惟昌夫の足音也。是也。西爪、
弓食、様相の佳品を出す。宇奈月、延勅
寺旅館へ行李を卸し朝枕を喰へす。
日電の副社長池尾芳三生より、八時三
十分一行結束して會社のトラックに乗り

宇奈月とおおまゝえどを數て渓流を汲みて
次に登りて登り、連山の根元をすくいしきり
う行く。かくかく時一ひ早けんとお連山の
奇勝駿遊玩する。山の雄偉の甲の御嶽
豊の駒駒馬に逢ふ。山の雄偉の甲の御嶽
の山の多きの最も瘦まへ。其處も高き
よ二千五百尺に及ぶ柳川に有る雪石あら
祝模さと大也。溪間高き岩橋を架す。
手を過く一方スハみ砂橋を架す。溪
流を下瞰し鷺の沙原をえふ。深瀬にて

シチル多く三十七八と数よ。猫又といふふと
かの取入口あり、其れ妙子に細さん、附辻の巣
毛と賣す、鶯五〇一の巣壁を賣す。し
宇奈月とおおまゝえどを上流に漸やく渓流
時間と寄り、えどを上流に漸やく渓流
の奔るを見る。前面の形貌鐘に似る
山あり、高さ二キメといふ、所謂鐘釣山
云々。此山を穿つてトンさんをあけ、昔は
ニ釣鐘温泉あり、現在は湯のみ全生

す、なんもトラック通（セイ）むす、車床（カーベッド）に憩ひ
徒歩（ヒュウボウ）で宿元（スルヤマツル）に行かんと擬（シテ）す、廣
いれども道跡（ドウセキ）也。余は四十耳、振（ブシメ）草鞋
を穿（アシ）て初めでジートルをあ脚（アキ）、縦（ヨコ）の行
く里路（リズル）、三の隊（セントー）を得て驛（エクシマ）も越す、とえども
道臺（ドウテイ）に跨（ハシ）余行くと底（シテ）、大股（オヘタ）矣（ヨリ）とせり
一行（イチヨウ）と別（ワカ）を物（モノ）金（カネ）これと、沈尾（シムテウ）の角（カツラ）、七余古
ニ詰（シテ）ぬ、鎧鈎（カマツケ）の差辰（サツヂン）三年以（ヨリ）と要（ヨリ）ひ谷
魚（イカ）の味（ミ）を可（ハシマ）也。こゝも品（モノ）トラック、一晩（イチヨウナイト）
械橋（エキハシ）のまゝ徒歩（ヒュウボウ）崖（カニ）下り、溪流（シトリ）

第一之吊橋（ヒンダツボウ）の上に立つ船客撮影（ボートゲスト撮影）を爲
す橋動搖（ヒュウボウテイヨウ）久しく主（シテ）のくわ、まつて岸上平
堺（シマカ）の地、今昔（クラシカル）のすゝみ子育（ススミコハラフ）、ええこ憩（シテ）る
て、お母（オモテ）山鈴鐘山（スリランカマツル）を咫尺（シキシマツル）間（マツル）、未だ
こゝも船影（ボートエイジン）も又トラックも舞（モリモリ）三時
半以後延勢寺旅館（エンセイジルカン）に達す、此の旅館
寺田稚三故村酒三浦山（ミタキササキサムラ）敷江島支
々本うねる、一行の内旅元（スルヤマツル）の旅を擇う
ぢるの萬象萬物（バンゾウバンモン）へりまう、道の餘（ヨリ）を
説く、一同房間（ルーム）に今アモ既（ハシマ）を既（ハシマ）と覺ふす

牧野坐
まきう酒を飲く、余を度シて東
京に廻ると、又寝台シテを爲め、駕馬と旅
一斤とせんと北苑宿に宿す、里郡ハはあ
とう駅大の使ひで、日電の往來モも亦駿
の大也、後局三十キロ六百キロ又幸ちゃんとす
ユ計画シナリオを写し、此地車シタカに比せんハ十が
以上深がい、く、渓アシの探討の時ハラクダ
のシヤウニ枚と重ね、上ニ縫入りドテラと
着レ^シ、此處北附山の勝り映画シナリオ
見る

二十三日

小雨、今月十九日、早朝車シタカを發ち、
信をも、また大陸原の市と朝令シタカと真シタカスアリ得
前夜の枝言三人考シタカ、卯酒シタカと試み一升酒
然シタカ、九時出シタカ、一行三支玉鶴シタカを浴シタカを兼シタカる
ニ越シタカハ他シタカのロマンスをゆく、十一時亦考シタカを音シタカる
お電車シタカ、乗シタカ、此のあと日電の開閉器
未滑川シタカを考え、岩瀬シタカの花肆シタカと壁シタカを當
山市シタカに入る。日電の仕事シタカを終了庄川又電

の堤堤二吉の一役と勤めと見え、六角車方
松村道三等と同勤室と社を七至
日据波呂山と呼ぶ者も、今代内にト
テウツヌキ後へ工事とある、技術の進
歩と大敗を教るを以て、工事の大西十五
年とし、日本新義成を先る移行
を改ニ成るの堤堤船を之と、高ナニラ
ナシ人東洋第一とし、庄川の元緑川が
ナリミセ第ニキビの力電船也
セエナリモナセナシトナリミセナリ四十

土着の船と宣し、その美觀三千番目
上と云ふ、擔任者不^レ知、就役は
人情を重んず、船にて自動車と船セ
寧山市に入り、五時過とも、中山ホテル
ニ入る北の木野瀬橋を渡り、高瀬水次
河口、一河合を走と其ノ一合とクルと外ニ
二人立看つてねえ花の家、總販の、度
々ニテ新弓、生身の奴、金子、小原ふじと
起く、九時前後を走り、汽車、技手、
市山みち多白松林、又見立と云ふと

車中今村嘉六様山童二合茶、渡電也
達成之歌

二十音

小雨、今朝拂曉碓冰とさく、家中の花束
と枝の大時孝子公上多有主にゆも、平大
き枝吹花瓶、色のあはれぬ吹枝吹花瓶、放送
協会と御社と御生を終了奉る、銅吹英
二の送至美正月和洋の外四面の旅行判り
一ノ録せず、志壯志を哉、うな象牙筒上

卷八
天川行稚如朝日報し未之又未
之而但多不也紫あああとくともねまこと勝
リ未の葉落と沈尾若三六角字大印ニ春
城義(義)波(波)那(那)是(是)五時内(内)未(未)竟(竟)抱
先東京小学校(小学校)に付(付)テ要(要)城(城)余(余)と内(内)
兵(兵)の學(學)を受(受)く、城(城)白(白)三(三)十(十)方(方)信(信)
一(一)と未(未)信(信)、早大(大)と校(校)視(視)聞(聞)了
書(書)數(數)利(利)支(支)天(天)候(候)次(次)
之(之)未(未)信(信)

二十九

古河軍無後耗打宗八も自尾太海東獨
山の内也事訪遠退の吉也二枚利未、萬圓
大數石津正男未、行龜山素三未の吉也
代金四百三十日銀、既も其未、福平
後旅銀を奉り、預金七千円引出す。也
追、神臺ニ枚志也、牡丹に候
み危こゆも、報むれど、軍部ニ
寄りとて、紀念宮主教多賀、未、四口
通支の計也。

二十九

此朝來旅銀とおもす、時の也、角田敬義
山田祐吉外二三旅銀を合算、年々の計本
常吉も山陽の遣文の字と跡づけよ、ち
高貢立目銀一と列未、寺院元を立、
次者三、お外物を略、既今記一年、即一と
の字代入地も、めたニつともあれ、あるまう
あを以る。毎四月同月未掛内、かく交せ、稿
田親的改成辰、號行、之と未添、未人、
進行税の本費一千九百、大役の榜半も

かど一筋野々、然後度漸ひ而立野
橋松四印とくと松の葉と如き所傳
程のるせ十九日九十七里、雪詫料、二十三日四十
七里、納付金少、小支をばてて敬重大也、而
花三段スルキートビーの候すを賜ひ奉詔の
映書しとえを仰ぐ、モ和地ニシモ未聞、お馬
御風火炎ニ引後援の事に歴人を論す

二十七〇

時、奉公室大ら木林賄美、萬石保とテ文、

奉る、石はす、仕事の奥を拵え、館は
と蓋下す、午後早大指内射波、射内
化念済、射流、わ破、射り、吉と申す、
一時も用飯式を及く、余まで委負と、と
して先づ吉事の往見、を戴きし、あ宿を
障ふ、既立ちの急上、の様士中打歌在ス、代
犯福助、矣子川城也の殺能を云ひ、は
内様士御前と射の改良、悔れ破の是を、と
以て、是棄棄と仰ぐ、其後、饭内と申す
一忠臣、を聞する、令弟、と申すを云々

人形才も展覧也。浮列と號被せしも、天氣
都合よく見る者多く、被前と椅子を設
け、余席ともす、先から坐りのさうを想
ハリあ、夕と暮らし家族、お簡廿一の被
失と雲甚んも物を左仰こたま、孺も、三月
懶意極く、沙汰をもどす。

二十八日

日

時二人寫稿、傍より訪余り御意見と書め研
石を貰ひ、和田萬吉と朱國、二三の人の鳴

之處一數派揮毫。以次余の勝優吉が下り来
る、和田に送商、飯塚彦次郎より文晁を(矣
因行私を示す。午後外生れを尋い物宅
後又押立毫、四時半上宅精矣。午新
赴く、今夜早大生飯部、達榮科の
諸義姫を昌利さんと、其の義姫
為四才君をねざ、余のため余合
乎後余之に津義姫を尋ね申す。之へき
二三の心地を決証し、既も内藤多仲
侍士の返済あり、九時ゆき、席大礼率

宿り町内を書生に附し若干手の空き附を
あり、愛犬武扇の墓巻と化もんとして其
墓院を差ま、日本弓道会社の石井南
主交役

二十九日

八九、鮮人劉应泰来り揮毫を呈、松本喜一
ち東の間余が過般の故郷を回す所遇の事
あめ御臺を表しま事ニ日本弓道の作井清
平時器一斗の技術を身に付、還して還す
吉田秀の人余代の事件の未疏、凌列

皆北飯の地名因山を跡り奉る、五反町站
おはら(?)と和食屋の傍教部と野り夫
ひ立て後日、飯後白井三印、袖毫を無
返す。今夜華族今破ニ文の協会の例会
をひらき、雪舟と高角しし里枝膳美の國
油文絵探討法を學び、アカラ、レヤウ
ジヤウ、ヘルシヤ等日本に文尚ある者
づか、孰特と説く所多う、十時会を終

三十日

而ち榜馬。押立も交付。奉宗より
ゆき行來つゝ利と告く。而前總大司
事務の書を以て、該額面を交付す。日
本社の施設に就し、該社一針の高下に一
篇を草す。村山秋濱未接。大津冬三上
り十日。柳子を以て、山の教城も未だ。
か後伐役の跋入校正相を一段。午後
えとはを三紙。均と將む。身

三十一日

此日本船より依附清まあ一箱を授す。今朝
薄色或次より森脚美树の手紙を待受
け候る。あ山の大隈邸に到り、日本古文花の
書簡を表す。四一と手紙をうまく
検討とつとの午後二時余をうゆる。
大字久米島新山陽北を死み墨山丸の
復活をねんこー太の首行のを仙

十一月

一〇

吟長井取佐木亮高草原の村元の首端に題
字と源子、大津不花山湯山大門に題被を
御す、田中猪俣村より行是役の件二時内
御す、急用乞戻至る。新ほ山三八と架
果大おを寄をまわし。出段郎もと川刊三行紀
本午後乞を付を坐起落被の映亮
セズ。由故田原尾、飯す、田原柔未ミ
寺訪ねと歸る。酒色より未訪

二日

雨、四代亮介來派、改上治原東う注射を施
す。田村森峰又行文内吉院の行法門題正
内議す、彦根城の所、海老を送る。吉田骨
董院経、三木村花山鴨脣茎の余火線外文
掲古セラ、五郎西村舞足、社村家、生
物部の薬件、うと手流、其の後年相、各
花の税金と通じ、料の流と天平人形才
立而颁布。十二月望高波二十畝分をいとく東
内到了。午後又人の為に神童を教矣が成る。

飯後下婢のもと柿をまくら来る、山田殿内
に着狀と題す、

三日

天安年

此朝來訪（よそぞまし）を許す、小切七枚持臺
丹吳原平、外狀と題す、西村德右衛門
よりおち白井ニヤシと余の抱其元、酒と御
心真と乞と候うち山の久墓を表す。詔
付御事、飯し、御案付の時意と観察
入り也、も木瓦同治。

樺原製

四日

皆起立を許す、剣石奏（けいせきさう）、持立
枚交付、上々玉承次承海玉、奉了す
の儀と出候也んと先け秋糾（あきくみ）ともとひ、
前石奥平（まついとうげい）の表（あて）墨の遠乃（とおの）三國傳
有りと示す、上々玉もと人原の夢セ
及多、宇都宮真時もと葡萄と
寄也來る、前國の元燈を擴張す、日本行
事の書中古は未だ未だ且つ全か寄
を教めども詫びて送りまくる、飯後漱波身

高橋房の書狀

五日

晴、往來のい出段跡の零件三日本庄、龜山東
三桂庵の遠間を尋ね、西柳代役主四日
掛内、田中吉野へ出京につき記述する。二月萬
高田半峰と雪詣だり、細川信玄すらう二罰
某の差め金の拘束をもとむかず三十日為
卷、村山秋浦を訪、午後町内と乗車して出游
伊丹を視て市中の装飾とえり、毛城翁

樺原製

五日、朝まで高橋と壁上に波を：モリ觀者
を対し、御座の金番、御身しゆく、平山やう
美玉と書、日六日耳、奉常をやうとすと

六日

晴、今朝陛下京都、行幸御直轄あるセミ
台湾奉相と茅子外教ある源了未る、深川の
猿木古代松に抱茎二枚、脚足、十時出御
部の參、御令に詔あ、御色亨、可否早
速報すと頼ゆ遠役の件、大隈參政次官

動ニ廻リまわる宇子郡官其の終未だ人未訪
旅館も有らず、出港部より利二郎配本
を賣く、陛下在宅允能也御有焉

七日

皆山田氏凡木林勝義御来訪、十時半日既印
刷の金段金口滿有、一時也往き場設し、高田
少之江と生收藏の行持後任の赴ニモ
内添、早大に到り、一時も枝紙へ奉り候
之薄文、為ひう、遂う歐西、聞し打合

権原製

あす未明四十九又ヨリテ衣ハ御承ヌル例也
今ハ予ト活版之例シミ張テアヘテ、沙翁
二十二〇年後、ヨリ八えす、松平尚白と改むる
是モウ承し、若ヒ多モ仰古也。今ノヲ活版刷
ニ席ヒ於て、印段のうち速か輸搬機の運
替ヒ可え。

八日

知今朝九時吉山の大興印と通ヒモ前り、
引つとも其も済、附すべき考前用紙半寸を

勇す。後毛利家より外一人史馬と来る。午後
二時物語、早稲田の事と報じ、予す。モ原おど
つ成る。村上家も榜中(中略)元氣を刊す。
立川の佐藤氏丸も小倉を賄ひ来る。和
田翁吉早稲田大吉も来也。林本吉長
代松毛と証也到る。

九日

陰、毛利健二和田高光、あれどもす、小林
堅三才訪、河井家俊後も来同、坂口敏吉

一橋原製

新らの報、社り共更送の手帖を報す。且つ
おと給ら。吉田秀人北野につき、小林江生一
出政部の要件、つゝ交りす。訪、福田謙よ
り来去、尾伊休種も。諸侯、其記を書せし者
先を付す。其御指使に飯(?)、葵飯にアシル、
トムス、ケビンを乞ふ。於こへゆく所を、ちば角、
多美之、

十日

庚、今日立郡。社毛利即位大典の行ひと日

也幸いめ時どひはり日出とし、乞乞支那
一とも三事の御を御取に訪て出放部と
玉露を御を御御(十一時)仰もあひの東
御と車簡、平山をもすし青画堂主目
船(五時)來、尾木北種の外交人と遊行
争と後、やほつあす、午後長井城に至る
信教さん御立宣を交付、益墨を祭る。
ラシオの放送も大典の御模様をさう
三時起立て、萬歳と喝る。

樺原製

十一日

日

此朝未獲好と並せず、役田藤生(うき)余り押立
の御考利は、春草心古洋大殿安考簡志社
の前会(未)、種打字ハヌ、訪ニ付出生放部(御武
ニツモ)内裏か、立橋廊(二)役筒、西村徳大(ウ
ラ)内里と詰(未)江巻石の派平山か表ゆると
托す、中田酒(未)事(未)持(未)と將(未)。抜毫も鉛
ニ葉(未)、午後聞(未)レ(未)の道具(未)
を整理(未)、滑(未)、校友(未)、村(未)も(未)未信

十二日

岐、中川銭三郎の外判了、京都を出博多を経て
大礼お詫びつゝ兵庫を経て、種村山高八村山
めぐら山越え、三並木を経て、文部省へ
北の山口内引出す。新潟とまた一時を経
す、五時頃新潟を出立り十数今に臨む。
曾我耐斬の者マツリと將る。

十三日

岐、往來出候御の事

二月十九日、附舟

樺原製

の様まことに、圓木、段上、弓、江射を施
す、やうやくあと高きものにて陵江未だ、と記載
ニ、訪れ、在来の意を差しもせぬす。中川銭三
や先の式に文三と代へ、坐、一考異一を務
ふ、午後四時分、次に、式所へ達り、酒
を酌み、酒を飲む。お馬御用、などと云ふ
言文、訪ねた所を察せり。早大もじ東古

十四日

岐、朝氣多々、良き坊物語と笑ひ且

つめす。ハルライオントヨモトヨハハ草井ニ
韓を主のて来る。日本郵船と株主会社
の員株利は、電氣港義の収支、有三十枚
と船名後所に記し、立時主事主側とし
計り、七時二十分より、往の江をさきえぬ
毛、今夜大當の御儀シ行ハセラ。

十五

雨、火災とよもと自動車と起し市中の装飾
を起。古城前と美濃の柱下の神輿を舁き

立石大河此と元、船は、行きあを海い、火、落
之使してゆること、四本と主と高橋をもとのま
う、雍奴を落す。飯山縣又利ニ利ニ吉野
信一泰宗スルノトヨ来間

十六

皆、森脇長樹大河家、ちく向敷と現、つき亦
公を手てある。十時半段部と立田かえ江井
おと今少し、元徳役と武田と本ち柳とみ
住すまこと左ニつまむ歎を改正すること等

を御遍り。お詫び後、田毛、圓本、不枝夫人、キノ原
翁主義と、四時風景、重柄他二通と細考満足
判了

十七日

吹、風、岸本祐武太、計判了。圓本記者、室
翁と其の夫、往村支江出の新の事の件、二竹未
法、小春、三、毫山、章、二三、詩も判了。美北院を
托して、道立、協、家廟造、墨書き成る。午
後散策行はれ。舟を海へりも行船。因、その
後散策行はれ。舟を海へりも行船。

樺原製

奉祝氣分、而浴たまひ、各叶御典へと昇
き廻り大なり振ふ。

十八日

日

吹、平山、石の利助あり。之後、充恵、山陽朱紙細
香、中安治翁翁、并附錄二冊一冊と贈る。
又久須義、雪老と書く者、筆者、義主田口と
投げて、之を於此を賣る。此刊の日本、久
日本人大限、の政治、兼、出、と題し、
論評する所、恰、子余の賣ります。

不を主、世人の見ても度余の又々所に異うる
事無休めど又れ怪我多き事、木山炭^{土主}高^高を除
か午後もと南峰^山、柏木間三々未^未所^所。復
後由^由當^當未^未北側^側吾^吾移^移を^を候^候、今^今満^満
柄^柄も^も便^便急^急利^利。

十六日

和^和鮮^人趙炳傑^金のち^と訪^訪予^予筆^筆、三枚^枚を贈^贈
つ^つて^て有^有、^有元^元村^村宗^宗八^八未^未、^未收^收部^部貢^貢之^之國^國
本^本之^之個^個々^々に^に相^相き^き、^之出^出收^收部^部守^守役^役也^也、^之つ
き^之雙^雙渝^渝す^す所^所も^も、^之乃^乃の^の異^異趙^趙高^高小^山

樺原製

二十九日

父^父子^子来^來り^りわ^を船^船、午^午未^未を^を供^供して^てあ^は、
難^難事^事を^を兼^兼す、萬^萬山^山東^東一^一三^三の^の方^方面^面を^をお^お
そ^そち^ち志^志の^のよ^よく^く、午^午後^後間^間三^三乗^乗し^し起^起變^變
京^京都^都も^も大^大漫^漫廣^廣也^也、^之モ^モセ^セあり^有浦^浦の^の消息^{消息}あ^あ

三十日

岐^岐、^岐後^后尾^尾國^國の^の多^多多^多燃^燃と^と、^之幾^幾尾^尾文^文の^の堂^堂
も^も難^難近^近郊^郊外^外と^と寄^寄て^てある、^此より^て金^金の^のい^い
え^えと^とある江^江河^河口^口と^と鶴^鶴橋^橋三^三洞^洞橋^橋の^の關係^{關係}の^のう^う
御^御が^が取^取り^りも^もご^ごと^と思^思ひ^ひ。浦^浦の^の或^或泥^泥印^印

森脇善太翁より大阪家吉前松北の方
針を據御す。十時出政部の重級會に
臨み奉側の決算、盈算、元俸役三え增加
不二つと定め取扱ふる事、退職するも現
程改正等を試す。一時の向毛、市井
四谷役場署より公文改、代人を出し所、新
築家宅、元義お達人とあらわよこれね
續役を織する旨の指示を逐々難解と
覺え、時を経ず、岸本能武太の支別式、
代人を出す。日活印刷今村、桂井、鶴来も同

樺原製

銀板

二十一日

而朝未旅館を卒下す。又行堂に物をもとす。土屋、
文雄も未と、京都大文字を並びて手札を投
す。去西秀人未後、早大校銀座より計画、販賣
の意向を告く、ちに附たり貰ひ子と云。此
を訴へ未と、断り状出す。預金五万圓り出す
内石圓也が三支付、午後又開く事か、旅館
を出す。高須橋、洋子を寄せる事あり。日本時

代を譲り、寝後又文豪春秋を譲り、

二十二日

皆、往來する少政部の件につき今井一や
早瀬田の枝に立つてともとひ、且つ押亮
を詔すをあつた。旅館を予てまく次男はあら
午前をせよよ、午後二時早瀬の枝御幸をめ
ニ临み、本の大体の方針決す。龜山書下三
ヶ所西城、角力内酒す。今朝三人合てお
糸破ひ、いそゞ、糸木才政重利。右中十日

樺原製

吉の秀へ文付、聞大りと来間

二十三日

岐、龜山東三山湯者簡幅と松谷も簡と
渉くまゆくおふす、少政部の式内社々に保
陰と附す江、つきす也治、先も保を出
游れば、あを難い、朱多と飯し、荔子故
の映画、見えしゆく、京都の谷村一大
即ちもとある、天皇御内飯の紀が御列
日程をみて来る、西村鶴をもと山湯

関係員附書の板を散葉とすもあ
京都就役候事(李毛もととあ)

二十四日

此高橋ゆ中東沿鐵の山河合村上の漆谷
を經、坤立毛の器を置す、木堅三木の、
大農家毛と恭修の初約を経て未の十時よ
り止岐部の指揮官に、歸む。日や暫どよ
り圓休、間もひ易き事にて可く、板本毛
ニ來り松の子入とひて其處米屋へ行

樺原製

乃向藝春三方、賛へ、うき以次先を御すまふ。
午後客を御し、桂一毫、ジアノの酒味の
来り、おろきの代古毛、梨果一茶利來、毛
ヘ、穀束、鶴生、毛、内子毛、往ふ、升多
ニ一杯を御す。ゆ、病打窓毛と未毛

二十九日

日

岐胡未物、立毛、桂一毫不機三人
未毛、龜山素三外二三旅、毛可接、真
今桂次毛主の信毛、毛林毛毛毛毛毛毛毛毛

先と伏見を教葉、二時向也、批立毛をう井
七郎、文付、藤枝北山も来簡、夜に入市
路廻り、塾生の為め大量一吸味を譲
い、九時止ゆも、大吹者三三とせたる元久の為
め近陣の空と全く古の風氣内状別、西村徳
大らき也れをあす

二十九

佐松未毛三人引つき来る。朝未既承と書
くま、往舟室へ來訪、諸病篤に相立と

棲原製

廿六日十時登校ヲ記委更今ニ歸り、四
時過冷を續けし後了ニ至り、廿九日
再会を約して教す。向後中略礼四中
五訪、久未仰御事九十の賀へて聞くに付
キの後、もう有り人を漏す、立時立因後
七二ねえ早大も、教授これに大隈令請
之晚おの興を多く、

二十七

西直の宿泊、祝酒と送る。及日就去

東洋事年記父の七〇の忌に紀念紙を
掌てことを場所もあらず、旅館も草す。
植木副二人ある。今御益西・簡子・元田
徳吉・小説・金はハジモチヌの者前判
又近刊書を題すまゝ、聖上半段三筋す
幸、多々の市中を走る者とばく記念
がく、各言而語て戒し為運ひの筋本多
く自動車にすら、一日の済く天全にじ
り(モ)駆け、泥濘(モ)ねじねじ生えぬ全(モ)も生の
三倍の時方をあぐ、自動車にせば

樺原製

二十八日

山田は化大江乙之彦川・東北内義文
寛永河木橋を西面すと改め、改
上北花可生に注射を玄く、矢吹荷三木
功・神臺と並ぶ、矢吹とれども、其の推
次年春打一大手・三間す、馬の頭(モ)・康(モ)
馬の頭(モ)・自取(モ)と為持毛(モ)・合(モ)ハ一
色(モ)を投す、四谷毛(モ)・家毛(モ)・幾(モ)・二程
四面(モ)納入、締考被(モ)・未刊(モ)・
一冊配奉。

二十九日

皆、難波見一^{アシ}校観の件、お来後は翁
一^ミも御本利の、お部詔破大文をすすめ
居す、十時登校校観委員会に臨む事
午迄に大綱を内渡す。林榮未^{ヨウミ}と云す、
上級部と之等ハ可^{アリ}否^{アリ}と云す。
内^{ナカニ}モ今日入^スぬ事、わう^ス、而^シ暮
參^ス、赴く。植木創^{リツキ}りつ^スき可^{アリ}松^{マツ}のキ^ス入^ス
らず、片山利久^{タケシ}來詣^ス、失^ス吹^ス、葉^ハ子^ノ系^ス、葉^ハ子^ノ判^ス
十四^チ號^ス、杜^ス高^{タカ}名^ニ號^ス、公^{ムカシ}モ元^ス代^スる國^ノ内^シ子^ス

樺原製

三十日

向^{アシ}、丹三室主^{ミヤコ}とお^スの^ス口^ス義^ス人^ス竟^スに速達^ス
促^スも^スあ^ス、日本回^ス支^ス協^ス会^スと^ス来^ス。

航行用と准備ある。行楽の由来
にあり十数點の物を准備し、其等は級
の四五の物と准備をゆく。出港部とし全の
印税勘定者より、未だ日本郵船の配布額
ぬ。

樺原製

樺原製

雨覽記

十六

棲原製

東
ば
し
ろ
い

